慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メディア記憶論の現代的展開
Sub Title	Contemporary developments of media memory theory
Author	佐藤, 信吾(Satō, Shingo)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2022
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.72 (2022. 3) ,p.197- 209
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20220300-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メディア記憶論の現代的展開

佐藤信吾

1　はじめに

本論文では，集合的記憶論とメディア論を架橋するメディア記憶論の現代的展開に着目し，集合的記憶をメディア実践に基づいて構築されるものと捉える必要性を理論的に考察する。「歴史の危機」について論じたテッサ・モーリス＝スズキは，

> わたしたちが思いえがく歴史は，たくさんの源泉からの寄せ集めである。その源泉は，歴史文書の叙述だけではない。親から聞かされたこと，写真，歴史小説，ニュース映像，漫画，そして（このところ伸張著しい）インターネットなどの電子メディア。そうした無数の断片が入った万華鏡をくるくるまわしながら，わたしたちは自分の生きているこの世界の起源と本質とを説明してくれる理解のパターンをつくっては，またつくりなおす（Morris-Suzuki 2005=2004［2014］：3）

と，「わたしたちが思いえがく歴史」が歴史学による学問的蓄積とは異なる文脈で，多様なメディアによって構築されている現状を批判的に考察している。この現象を集合的記憶の問題として捉えたのがメディア記憶論である。現代社会において，人々はマス・メディアやデジタル・メディアに描かれる過去の出来事を視聴し，その枠組みを参照しながら集合的記憶が構築される。そして「記憶論の研究者が集合的記憶の領域を考察するためにメディアに着目する一方，メディア論の研究者がニュース，映画，新しいメディア・コンテンツなどを形成する上での集合的記憶の役割への調査を繰り返す」（Neiger et al. 2011：1）状況が学問的にも生じている。「メディア記憶（media memory）」（ibid.：2011），「メディア化された記憶（mediated memories）」（Van Dijck 2007），「メディアと記憶（media and memory）」（Garde-Hansen 2011）など多少の用語の差はあるものの，「メディア」と「記憶」の関係を捉える研究は，社会学の一つのトレンドと見ることができる。日本でもたとえば野上元は，戦後生まれの私たちが戦争体験を「知る」とは，「体験者たちが残した様々な種類のテクスト」を「諸メディアの配置によって条件付けられた一定の情況のなか」で読むことであるとして（野上 2006：9），「メディア体験」としての戦争体験の理解の必要性を説いている（野上 2010：113）。野上の研究は，戦争の記憶をメディア記憶論として捉える代表的な研究の一つといえる。他にも絵画やアニメーション，ウェブサイトといった具体的なメディアに着目した数多くの記憶論が提起されてきた（浜井編 2017；谷島・松本編 2017）。

この集合的記憶のメディアによる構築過程を考える上で重要になるのが，ニック・クドリーが提示した「メディア実践」である。クドリーは「メディアを実践として分析する」

ことを「世界の中で人々が行う開かれた一連の事柄として」メディアを分析することと定義している（Couldry 2012=2018：43）。「曖昧で捉えにくいかたちで存在している集合的記憶の対象化には，メディア論的なアプローチが求められる」（野上 2011：241）とされるが，クドリーの議論を参照すると映画やドラマ，新聞といった個々のメディアが描き出す記憶を別々に分析するアプローチだけでなく，ジャーナリストやソーシャル・メディアのユーザー，政治家といったさまざまな主体のメディア実践が複合的に重なり合って構築される集合的記憶を理解するアプローチが必要になる。そこで本論文では，社会学における集合的記憶論の発展の背景を確認し，その延長線上にメディア実践を中心に据えたメディア記憶論を位置づける意義を説明する。その上で，「記憶の場」，文化的記憶，機能的記憶，蓄積的記憶といった集合的記憶論の中心概念をメディア実践から捉え直す方途を提示し，メディア記憶論の理論的深化を目指す。

2　メディア記憶論の興隆の背景とメディア実践

メディア記憶論を考察する前に確認しなければならないのが，1990 年代の「記憶ブーム（memory boom）」である。ジョアンナ・ガーデ＝ハンセンが，「記憶ブーム」と「記憶を利用することに貪欲（memory-hungry）」なメディア・テクノロジーの発展の双方が重なり合ったことで，メディア記憶研究が発展したと述べているように（Garde-Hansen 2011：28），メディア記憶論の前提には「記憶ブーム」と集合的記憶論の進展がある。本章ではこの点を概観した上で，記憶の社会学においてメディア実践を踏まえた集合的記憶の構築過程に関する議論が求められる理由を説明していく。

2-1　「記憶ブーム」の到来と社会学における集合的記憶論の発展

1990 年代には，記憶に関する諸問題に関心が集まる「記憶ブーム」が世界的な広がりをみせた。「記憶ブーム」の初期にこの現象に言及したアンドレアス・ヒュイッセンは，現代社会において「歴史や歴史意識の衰退，政治的・社会的・文化的な記憶喪失についての悲嘆」，「歴史以後（posthistoire）」に関する「さまざまな言説」の登場が「前例のない規模の記憶ブーム」を伴って発生していると述べた。結果として「人文学，社会科学，自然科学の分野で，記憶についての議論が広範に行われる」だけでなく，「国家の枠組みを超える組織が出現している時代において，ナショナル・アイデンティティの問題は，文化的あるいは集合的記憶という観点から議論されることが多くなっており」，国家は「差し迫ったトラウマ的な記憶喪失の恐怖に悩まされるかのように，博物館や記念館を建設し続ける」一方で，「ジェンダー，セクシャリティ，人種をめぐるアイデンティティ論争の激化に伴って，（公的な政治的・文化的記憶ではない）記憶や物語が前景化する」現象が起こっている（Huyssen 1995：5）。この「歴史や歴史意識の衰退」と「アイデンティティ・ポリティクス」を背景とした「記憶ブーム」という構図は多くの論者によって指摘され（Olick & Robbins 1998；Winter 2001），「記憶ブーム」の社会学的分析の主要な論理となってきた。

21 世紀に入って，実社会における「記憶ブーム」は加速している[1]。ホロコーストに代表されるナチス時代の加害の記憶および連合軍の空爆などによる自国の被害の記憶を積極的に議論し，その解釈をめぐって実力行使を伴った対立が起きているドイツでは，「記憶疲れ（memory fatigue）」が起きていると指摘される（Langenbacher & Eigler 2005）。また日本と中国や韓国とのアジア・太平洋戦争における加害／被害の記憶のあり方をめぐる対立について，日本国民の間では不満や諦め（日本がいくら謝っても，中国や韓国が許してくれないとする「謝罪疲れ（apology fatigue）」）の気持ちが高まっているという社会

分析もある（Fukuoka 2018）。これらの「疲れ」が倫理的・政治的に妥当なものかは別として，こうした認識が広がるほどに記憶は社会的関心事になっている。

そして「記憶ブーム」は，集合的記憶論に理論的発展をもたらした。第3章で検討するピエール・ノラの「記憶の場」（Nora 1984=2002；1992=2003），そしてヤン・アスマンとアライダ・アスマンによる「記憶史」のプロジェクト（Assmann, J. 1998=2017；Assmann, A. 1999=2007）など，集合的記憶に関する重要な理論もこの時期の「歴史や歴史意識の衰退」といった問題意識から現れている。ここに挙げた三人は歴史学者であり，各理論は「歴史」と「記憶」を対照させるなかで提示されたものだが（安川 2008：297），歴史学にとどまらず社会学や文学にも大きな影響を与えている。実社会における「記憶ブーム」は，モーリス・アルヴァックス以後の集合的記憶論の理論的発展にも大きな影響を与えたといえる。

2-2　メディア経験からメディア実践へ：メディア論と記憶の社会学の結節点

「記憶ブーム」は社会学におけるメディア論と集合的記憶論の接近をもたらした。集合的記憶論の創始者とされるアルヴァックスは，記憶を論じる上でメディア論をめぐる諸問題には特に関心を示さなかったとされる（Person & Keith 2017：9）。実際に著書の『記憶の社会的枠組み』（Halbwachs 1925=2018）や『集合的記憶』（Halbwachs 1950=1989）でも，「家族」や「宗教集団」，「リセー（高校）のクラス」といった対面のコミュニケーションを基礎とする社会集団に焦点を当てて集合的記憶が論じられており，メディアと記憶の問題は前景化していない。しかし1990年代には，メディアやジャーナリズムを対象とした研究における，集合的記憶への関心が高まってくる。例えばバービー・ゼリザーは，現代社会において「過去の物語はメディアが記憶することを選択した物語，そしてメディアの記憶が私たち自身の記憶へと転換される仕方で形成された物語の一部として残存することとなる」（Zelizer 1992：214）と指摘し，マス・メディア論と集合的記憶論の接合を試みた。またマイケル・シュドソンは，さまざまなメディアに描かれる記憶を考察し，集合的記憶の特徴は「争い，対立，論争」であると結論づけている（Schudson 1995：361）。

ゼリザーやシュドソンの議論の前提には，マス・メディアやデジタル・メディアの発展というメディア環境の変化がある。このメディア環境の変化を捉えて，人々の「メディア経験」や「メディア実践」を中心に据えた社会学を構想したのが1980～90年代にイギリスの各大学でメディア系学部の新設に尽力したロジャー・シルバーストーンとシルバーストーンの批判的継承者のクドリーである。両者は「メディアがわれわれの日常生活にとって中心的であるが故に，われわれはそれを研究しなければならない。メディアを現代世界の政治的，経済的な次元としてばかりでなく，社会的，文化的な次元として研究しなければならない」（Silverstone 1999=2003：31-38），「少なくとも一九九〇年代初頭まで，社会学および社会理論はメディアについて論じることに関心を払ってこなかった」だけでなく，「メディアを重視する社会学者」であっても，基本的には「メディアの技術的基盤」にしか注目してこなかった（Couldry 2012=2018：ix）と主張し，人々の「日常生活」におけるメディアとの関わりを捉える社会学の必要性を唱えた[2]。オーディエンスの「多様な読み」を分析する「能動的オーディエンス論」がカルチュラル・スタディーズにおいて1980年代に発展したこと（山腰 2012：28-33），1995年のMicrosoft Windows 95の発売に代表されるデジタル・メディアの普及，「オーディエンスであること」を単なる「視聴」，「聴取」，「閲覧」という範囲で捉えることが困難になったこと（Ross and Nightingale 2003=2007：4-5）などが重なる中，シルバーストーンは「（メディア・）テクノロジーを単なる装置として理解する」のではなく，人々の「技能や能力，それに知識や欲望を含み

込んでおり，それらなしに装置だけでは作動することができない」ものと考える視点を提示した（Silverstone 1999=2003：65）。

シルバーストーンは「メディアが最も重大な作用を及ぼしている」のは，「ありふれた世俗的な世界においてである」（ibid.：31）としたうえで，日常生活における人々の経験をメディア経験として捉えようとした。彼はインターネット，新聞，テレビなどを行き来しながら情報を摂取する現代人を「遊牧民（ノマド）」（ibid.：35）と表現し，メディア経験の重層性と日常生活における中心性を強調している。メディアがもつ力は，いまや「生活の表層にも，そして深部にも働き，われわれの経験を構造化している」（ibid.：306）のであり，メディアの権力という側面からも日常生活におけるメディア経験の分析が求められている。このシルバーストーンの指摘を「行為」という点から発展させたのが，クドリーのメディア実践論である。クドリーはまず，「メディアがまさに生成することを通じてわれわれの能力の拡張を可能にする，という固有の『技術的貢献』」の理解を深めることを目的としたフリードリッヒ・キットラーらの「メディウム理論」を批判し，「メディアが構築し，可能にする社会諸過程」を分析する「社会志向のメディア理論（socially oriented media theory）」の重要性を論じた（Couldry 2012=2018：10-11）。その上で，「人々はメディアと関連するいかなる行為をしているのだろうか」（ibid.：59）という問いを立て，現代社会におけるメディア理論と実践理論の結合に取り組み，メディア実践という概念を提示する。個々人の実践は完全に個々人の自由に委ねられているのではなく，通時的に構築されてきた日常生活のルーティーン，メディア文化，メディア・テクノロジーのアフォーダンス，社会規範などに規定されながらメディア空間に表出している。そしてメディア空間は「ある特定の実践が他の実践と調和することによって生み出される秩序」（ibid.：70）によって成立する[3]。

メディア実践の主体は多様である。クドリーはメディア実践を「メディアに対して向けられた行為，メディアを通じて遂行される行為，メディアを前提とした行為」（ibid.：91）に区分して分析しているが，こうした行為はさまざまな主体によって日々営まれている。ソーシャル・メディアでの匿名のユーザーによる投稿，新聞紙面でのジャーナリストによる報道，動画サイトでの政治家による選挙演説，テレビ番組での芸能人の発言などは，いずれも「メディアに対して向けられる行為」であり，「メディアを通じて遂行」され，「メディアを前提」としている。現代社会は，さまざまなメディアを通じた多様な人々のメディア実践によって構築されるメディア空間が充満した社会であるとクドリーは捉えている。

従来の記憶の社会学における「実践」は，主として「記憶（追悼）実践（mnemonic practices）」を指していた（Olick & Robbins 1998；Fox & Alldred 2019）。しかしシルバーストーンやクドリーの指摘を踏まえるならば，現代社会における記憶実践もメディア実践として捉えられる。「記憶ブーム」を通じて盛んになった集合的記憶の構築過程に関する議論は，メディア実践を中心に据えることで，現代のメディア社会を分析するのに適した形になる。

3　メディア記憶論の現代的展開とメディア実践

前章では「記憶ブーム」とそれに伴う集合的記憶論の発展，そして記憶の社会学にメディア実践の視点を導入する必要性を論じた。本章ではモッティ・ネイガーによるメディア記憶論の現代的展開の分類をメディア実践という観点から再解釈する。さらに，ノラ，J. アスマン，A. アスマンによる集合的記憶論をメディア実践と接合することで，メディアによる集合的記憶の構築過程をより精緻に分析していく。

3-1　メディア記憶論の現代的トレンドとメディア実践

そもそも「読み書きができることで，何をどのように記憶するかが根本的に変化し，文字による記録を残している社会とそうでない社会では，過去との関係が異なる」（Olick et al. 2011：6）と言われるように，原始時代から集合的記憶はその社会が保持するメディアによって規定され，その社会の構成員のメディア実践によって構築されてきた。そして現代社会では，社会的記憶だけでなく「（個人的）経験を想起する営み」も「ドキュメンタリーや映画，文献，デジタル化された物語，ビデオ日記などを通じて完全にメディア化されている」（Garde-Hansen 2011：42）。壁画を描いていた時代からメディアと記憶（想起）とが不可分の関係にあったとすれば，メディア記憶が対象とすべきメディアの概念は広範である。そのなかで特に，現代社会における集合的記憶を特徴づける重要なメディアがマス・メディアとデジタル・メディアであり，この二つのメディアに着目して6つの軸から現代のメディア記憶論のトレンドを分類したのがネイガーである（Neiger 2020）。ただし，ネイガーはメディア実践を中心に据えてはいないため，以下では筆者がこの分類をメディア実践に引きつけて再解釈した上で提示する。

① 現在から過去への視点と過去から現在への視点というメディア記憶論の双方向性

アルヴァックスの集合的記憶論は記憶の「現在主義」的解釈（Coser 1992）とされる[4]。これは現在の視点から過去の出来事の理解がどのように構築されるかを分析するアプローチであり，例えば戦争や自然災害の記念日において，マス・メディアが「ニュース（新しい出来事）」として慰霊祭を報道し，ソーシャル・メディア上でも追悼の投稿が増加する中で，特定の想起の枠組みが構築されることが明らかになる。一方で現在から過去へという上記の視点には批判もある。マイケル・シュドソンは式典や記念日ばかりに着目する研究を，分かりやすいところだけを研究して，肝心なところを見ていないという意味で「酔っぱらいが街灯の下で鍵を探す現象」（Schudson 1997：3）だと批判し，日常のメディア実践における記憶の構築過程，および社会的言説に浸透した過去の出来事が，現在の理解に影響を及ぼす過程を明らかにすべきだと主張した。特定の記念日や記念式典だけでなく，ストレート・ニュースの生産過程や日々のソーシャル・メディアへの投稿でも，ジャーナリストやユーザーは現在の出来事の意味を理解するために集合的記憶を参照する。メディア記憶論には，現在のメディア実践を通じた集合的記憶の構築過程に目を向けるものと，過去の出来事が現在の言説に浸透し，現在のメディア実践に影響を与えると考える視点の双方が併存している（Neiger 2020：3）。

② メディア・テクストやメディア・プロダクトのなかに具体化されるメディア記憶

記憶という概念自体は抽象的なものなので，それが文化的意味を帯び，集合的記憶として人々の間で流通するためには，具体化（concretize）と物質化（materialize）が欠かせない。現代社会では，ドキュメンタリーやフィクション・ドラマ，ニュースといったマス・メディアのコンテンツ，ブログやソーシャル・メディア上での記念や追悼に関する投稿などが相互作用しながら，特定の過去の出来事が文化的意味を帯び，集合的記憶として具体化・物質化される。メディア記憶論がテクストやコンテンツを分析する際には，内容分析だけでなくユーザーやジャーナリストのメディア実践を通じたコンテンツの生産・流通過程まで視野に入れる必要がある。また新聞が報じた内容をテレビが取り上げ，それがソーシャル・メディア上で拡散されるといったメディア同士の相互参照による集合的記憶の構築過程についても，メディア記憶の具体化の過程として考察しなければならない（ibid.：3-4）。

③　メディア記憶がコミュニティに対して果たす機能的役割

集合的記憶は過去の出来事に統一的な意味を付与するものであり，エリック・ホブズボウムの「創られた伝統」（Hobsbawm & Ranger 1983=1992）やベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」（Anderson 1983=2007）の議論と同様に，マス・メディアの存在を前提としている。マス・メディアが提示する過去・現在・未来の出来事に関するコンテンツを多数の人々が同時に消費することで，社会的な結束力は強化されていく。

ただしシルバーストーンやクドリーが指摘するように，現代社会に生きる人々は複数のメディアに接しながら，異なるアイデンティティを同時に保持している。例えば，ある都市の生活者として地方紙を読み，ファンとして専門チャンネルでサッカーを観戦し，保守派として右派系のラジオ放送を視聴し，人気テレビシリーズのファンとしてオンラインのグローバルなファン・コミュニティの一員となっている。メディア記憶論は，マス・メディアによって構築される国家的記憶が人々を一つの国民国家の成員へと統合する点だけでなく，多様なメディア実践の結果として構築される集合的記憶が各コミュニティにおける成員の結束力を強める役割を担う点についても分析する必要がある（Neiger 2020：4-5）。

④　メディア記憶の社会・政治的側面

時事問題を評価する際にも，集合的記憶はしばしば活用される。例えば，シュドソンはウォーターゲート事件がアメリカ社会においてどのように記憶され，政治やジャーナリズム，世論にどのような影響を与えているかを考察している（Schudson 1992）。ネイガーはこの事例などを参照し，メディアが集合的記憶を顕在化させる「ステージ，アクター，ディレクターという三重の役割を担っている」と指摘している。政治家や行政機関などの政治的プレイヤーは，マス・メディアやソーシャル・メディアという舞台で，メディア実践を通じて自らの正当性を歴史的文脈に位置づける（ステージとしてのメディア）。また，新聞社やテレビ局，ソーシャル・メディアの運営会社は，自らの社会的立場や意義を示すために，過去にメディアが果たしてきた役割を強調し，現在との連続性を語る（アクターとしてのメディア）。そして，ジャーナリストによる取材やソーシャル・メディア上でのハッシュタグの利用は，個人的記憶を編集し，一つのストーリーへとまとめ上げ，集合的記憶化する（ディレクターとしてのメディア）。過去の出来事は，現在の出来事に政治的・社会的意義を付与するためにメディア実践を通じて想起される（Neiger 2020：5-6）。

⑤　記憶のメディア化のプロセスにおけるメディア・テクノロジー的側面の分析

現代社会において，メディア・テクノロジーは発展を続けている。最新の技術を用いたテーマパークや映画は，過去の出来事を「リアル」なものとしてオーディエンスに想起させる。また人々はデジタル・メディアを用いて日々の生活を記録するが，Google や Facebook といったプラットフォームは年月を経てからその記録を人々の前に再提示し，半強制的な想起を促す。テレビは特定の日付をイベント化し，人々の集合的な想起の枠組みに影響を与えている。そして記憶の構築主体のメディア実践もテクノロジーの影響を受ける。ジャーナリストは新聞の締め切りやテレビの放送枠，インターネットの技術的制約を受けながら過去の出来事を報道しており，政治家もメディアの特性を理解しながら人々に国家的記憶の想起を促す。メディア記憶論はテクノロジーと想起の実践の問題にも目を向ける必要がある（ibid.：6-7）。

⑥　メディア記憶の物語論的特徴と形式

メディア記憶は，よく知られた文化的パターンに沿って構成される。より詳細に検討す

ると，物語の始まり，出来事の発展の連続，結末（オープン・エンド／クローズド・エンド），主人公と敵役，対立と挑戦，妨害と勝利（大きな勝利／小さな成功）を特徴とするストーリーを，多くの場合は含んでいる。ゼリザーはジョン・F・ケネディ大統領の暗殺事件の記憶を事例に，ジャーナリストを重大事件の記憶に意味を付与する主体と捉える必要性を論じている（Zelizer 1992）。一方で，ジャーナリストが重大事件に関する取材方法や実践をナラティブとして記憶し，そのナラティブを共有する人々が職業的共同体を形成するという「解釈共同体」（ibid.）の議論もメディア記憶の物語論的分析である。もちろんジャーナリスト以外の主体のメディア実践による集合的記憶の構築過程にも同様の特徴がある。人々が特定の過去の出来事を想起できるのは，その出来事が分かりやすい物語の形式に沿っているからである。その物語が想起の枠組みを画一的なものにする側面だけでなく，物語を共有する人々を互いに共同体の構成員として認識させる側面からも，メディア記憶の物語論的特徴に関する研究が蓄積している（Neiger 2020：7-8）。

ここまでメディア記憶論の現代的展開に関するネイガーの分類を，メディア実践に着目して再解釈した上で概観してきた。現代社会における個人的記憶及び集合的記憶の構築過程には，マス・メディアやデジタル・メディアが深く関わっている。そしてメディア記憶を社会学的に分析する上では，テクノロジーの発展にばかり注目するのではなく，多様な主体のメディア横断的な実践と主体同士のメディアを通じた相互作用に目を向ける必要がある。

ネイガーの分類は主にメディア論やジャーナリズム論の先行研究に依拠して作られている。一方でメディア記憶の研究をメディア実践の観点から再構成するためには，集合的記憶の理論的発展も視野に入れる必要がある。以下で検討するノラ，J. アスマン，A. アスマンは，アルヴァックス以上に複雑で多層的な集合的記憶論を展開しており，そうした議論をメディア実践の観点と接合することで，メディアによる集合的記憶の構築過程を，より詳細かつ理論的に理解できるだろう。

3-2 「記憶の場」のメディア化と来訪者のメディア実践

1980 年代から 90 年代にかけてノラが提示した「記憶の場」は，集合的記憶を論じる上での主要な概念の一つとなっている。ノラは「記憶，すなわち過去との連続という感情」が残存する「場（lieux）」を指して「記憶の場」と呼んだ（Nora 1984=2002：30）。「『記憶の場』には，過去のイメージが凝縮され，象徴的に体現されており，集団はこれらの象徴を介して自らのアイデンティティを想像し，創造する」（神谷 2016：80）とされる。「記憶の場」は，特定の過去と現在との「感情」的な連続性を強調し，その「記憶の場」を重視する集団（国民国家，地域社会，家族など）のアイデンティティを「想像」するだけでなく，「創造」する一助となる。そして「記憶の場」に関する多数の研究は，参照される対象（過去）に着目するものと，その対象が与えられている方法（場）に着目するものに大別できる（Szpociński 2016：248）。この二つの方向性にメディア論の視座を導入すると，前者は来訪者のメディア実践による集合的想起／忘却の問題，後者はメディア・テクノロジーの発展による「記憶の場」の変容と，テクノロジーによる来訪者のメディア経験の規定の問題と捉えられる。

まず後者の点を論じていく。ノラは，「砕け散ったナショナルなものの再構成を可能にする」（Nora 1992=2003：469），「国民の歴史がわれわれの時代においてとる姿である」（Nora 1984=2002：54）と，「記憶の場」を国家（ナショナル）と結びつけて論じている。しかしメディアを通じたグローバル化が進展している現代社会では，「記憶の場」もグローバルとローカルという点から考察されなければならない。例えば 2021 年に行われた

9.11 アメリカ同時多発テロの 20 周年記念式典は，NBC や USA TODAY，CBS の YouTube チャンネルを通じてライブ配信された。コメント欄には「私はアメリカ人ではないし，20 年前の 9.11 で死んだ友人や家族はいないけれど，あの時以来私の魂の一部は失われた」，「フィリピンより愛を込めて」，「イタリアより」といった投稿も数多くなされ（「NBC News」2021/09/11, https://www.youtube.com/watch?v=oWrRbXPEnds：2021 年 11 月 9 日閲覧），オンラインを通じた「記憶の場」のグローバル化が，国境を越えた慰霊の実践を可能にしている。ただし式典ではアメリカ国旗が掲げられ，ジョー・バイデン大統領が「我々は国民として（as a nation），我々の歴史上最も暗い時期に失われた人々や，遺族や愛する人の永遠の痛みを忘れてはいけない」とツイート（@JoeBiden 2021/09/11 PM10:03：2021 年 11 月 9 日閲覧）するなど，「ナショナルなもの」が強調されている。つまり現代社会における「記憶の場」は，メディア・テクノロジーを通じたグローバルな慰霊の実践とナショナルな想起を両立させている。

また近年では，ローカルな「記憶の場」における来訪者の経験が変化している。例えばミュージアム研究では，メディア・テクノロジーの発展に伴う来館者のメディア経験の変容が論じられている。ミュージアムには，コンピュータ・キオスク（館内専用のアプリケーション利用端末），音声ガイドを発展させた携帯型情報端末など，来館者の操作と展示物からの情報の「双方向性」を意識したテクノロジーが浸透している。こういったテクノロジーの利用による「双方向性」の進展は，来館者の「選択する裁量の拡大」に寄与する一方で，「来館者／来館者」間の対話の幅の縮減や，展示ガイドの導入による「注目すべきもの／しなくてよいもの」の事前選別といった問題も含みながら，ミュージアムでのメディア経験を変容させている（光岡 2017：216-254）。「記憶の場」である記念館や慰霊碑での来訪者の体験も，ミュージアムと同じようにメディア・テクノロジーの影響を受ける。ローカルな「記憶の場」における経験は，リアルな再現映像やデジタル・アーカイブ化された遺影，音声ガイドを通じて届けられる解説などのメディアによって規定される。

そして「記憶の場」での来訪者の体験は，その後のメディア実践によって集合的想起／忘却の問題へと接続する。来訪者がジャーナリストであれば，そこでの取材はドキュメンタリーやニュースを通じて広く報道される（佐藤 2021）。また「記憶の場」を訪問した際に感じたことを国会で述べることで，政治家が自身の主張を正当化することも少なくない[5]。そしてソーシャル・メディアやブログが発展した現代社会では，一般の来訪者も気軽にインターネット上に自身の体験を書き込むことができる。「記憶の場」を現在のメディア環境と接合して考察する上では，ローカル，ナショナル，グローバルといった段階における人々のメディア実践と，そこで構築される想起の枠組みを視野に入れる必要がある。

3-3　文化的記憶，機能的記憶，蓄積的記憶とメディア

集合的記憶論のアルヴァックス以後の展開を考える上で，ノラと共に欠かすことのできない思想家が J. アスマンと A. アスマンである。アスマン夫妻は歴史学の一分野として「記憶史（Gedächtnisgeschichte）」の可能性を探求し，集合的記憶論の 2000 年前後の理論的発展に大きく貢献した。

まず J. アスマンの「記憶史の諸目標」を概観する（Assmann, J. 1998=2017：26-36）。J. アスマンは「本来の意味での歴史」とは異なる，「想起される過去」，「過去が読み解かれていくときの通時的な連続性や不連続性を調べる」学問として記憶史を構想した。記憶史は「伝承における歴史的なものを神話的なものから分離すること，そして過去を保持している要素を，現在を形づくっている要素から区別する」ことを目指す「歴史実証主義」とは異なり，「伝統の神話的要素を分析し，それらの神話的要素に秘められた意図を明らか

にする」ことを目指すとされる。記憶とは「過去を再構築する不断の作業」であり，「われわれとは，われわれが想起するところのものである」という前提を受け入れるならば，この「不断の作業」によって構築された「神話」は，「ある集団，ある社会，ある文化」の糧となり，「わたしたちのアイデンティティ」を形成していく。つまり記憶史は，アルヴァックスの『集合的記憶』（Halbwachs 1950=1989）や『記憶の社会的枠組み』（Halbwachs 1925=2018）では前景化しなかった「想起される過去」の「通時的」な側面を研究するプロジェクトである[6]。

「記憶史は文化的記憶の歴史を研究する」（Assmann, J. 1998=2017：36）と述べられているように，記憶史を考える上で重要になる概念が「文化的記憶（kulturelles Gedächtnis）」である。アスマン夫妻はアルヴァックスが理論化した集合的記憶を，「コミュニケーション的記憶（kommunikatives Gedächtnis）」と文化的記憶という二つの概念に区別し，さらに文化的記憶を「蓄積的記憶（Speichergedächtnis）」と「機能的記憶（Funktionsgedächtnis）」へと分類している。以下，アスマン研究の日本における第一人者である安川晴基（2008）の議論を参考に，この四つの概念の意味を整理する。

コミュニケーション的記憶とは，「個人の有機的な記憶を基盤とし，具体的な生活連関におけるコミュニケーションと相互行為を通じて自然発生的に形成される」ものであり，「個人がその人生の枠組みの中で同時代人と共有している最近の過去についての経験」の記憶である（ibid.：288）。これはアルヴァックスが関心を向けた，近しい人々同士の「集団」の内部で共有される「想い出」としての集合的記憶（Halbwachs 1950=1989：4）と対応する。コミュニケーション的記憶は「具体的な生活連関におけるコミュニケーションと相互行為」を基礎として，「同時代人と共有」されている必要があるため，何世代にもわたって継承される記憶ではない。一方でアスマン夫妻は，「社会の『長期記憶』」であり，「集団の同一性を維持する文化装置としての，制度化された集合的記憶」である文化的記憶に焦点を当てた（安川 2008：287）。「個人の有機的な記憶を基盤」として「自然発生的に形成される」コミュニケーション的記憶と異なり，「制度化」された記憶である文化的記憶は，「外在化された蓄積メディアと文化的実践を通じて構築される」（ibid.：287）。つまり，文化的記憶はほとんどの場合でメディア記憶であると考えることができる。文化的記憶は人々のメディア実践によって構築される「伝統」であり，国民や民族，家系といった集団の同一性（アイデンティティ）を維持する機能を有する。

さらに文化的記憶は，「特定の集団とのつながり」，「選択的性格」，「価値に拘束されていること」，「未来に向けられていること」を特徴とする機能的記憶と，「現在との生きたつながりを失った」蓄積的記憶とに細分化できる（Assmann, A. 1999=2007：163-164）。この分類は，「忘却」という現象に新しい説明を加える。「忘却」とは，機能的記憶が現在の「特定の集団とのつながり」を失い，蓄積的記憶へと「撤去」されることであり，「所有者のいなくなった品物」である蓄積的記憶は「保管」され，「再び評価」されることで新たに機能的記憶に「仲間入り」する（ibid.：164）。過去のイメージが機能的記憶と蓄積的記憶という状態を行き来することが，現代社会における想起／忘却である。このダイナミズムにメディアという視点を導入すると，社会の「長期記憶」としての文化的記憶への理解が進展する。

まず蓄積的記憶において重要なメディアがアーカイヴである。蓄積的記憶は「無定形の集塊」であり，「意味の付置にはめ込まれない」状態である（ibid.：165）。この蓄積的記憶が残存するためには，「身体の外部に位置し，人間の記憶から独立した蓄積メディア」である「文化的アーカイヴ」（ibid. 167）が必要になる。人々の意識の外側に想起の可能性が存在し続けるためには，アーカイヴが整備され蓄積的記憶ができる限り保存されなければならない[7]。一方で機能的記憶と結びつくメディアがマス・メディアである。機能的

記憶は「国家や国民といった集合的な行為主体」と結びつき，「わがものとされた記憶」である。さまざまな行為主体は「構造を持たず相互につながっていない諸要素」を「組み立て」，「構成」し，「結合」することで機能的記憶を構築する（ibid.：167）。そして，「全体主義社会では，集合的記憶を作り管理するのは国家である」一方，「民主社会では，これに加えて市民，芸術家，政党，そしてとりわけメディアがそれにあたる」（Assmann, A. 2016=2019：16）。テレビや新聞といったマス・メディアの多くは国民国家を基礎に成立しており，そこで構築される機能的記憶は一定の意味づけがなされた上で，国民のアイデンティティを補強する記憶として作用する。またソーシャル・メディア上でも，過去の投稿がまとめられることで特定の出来事の記憶に注目が集まる。これも「つながっていない諸要素」の「結合」による機能的記憶の構築といえる。

この蓄積的記憶と機能的記憶を結びつけるのが，メディア実践である。蓄積的記憶は現在の集団にとっては役に立たない記憶であるものの，「中立的でアイデンティティに関して抽象的な客観的知識」であり，「逸した諸々の可能性，代替的な選択肢，利用されざる機会のレパートリーを含んでいる」（Assmann, A. 1999=2007：167）。つまり蓄積的記憶が人目に触れずともアーカイヴのなかに保存されていることは，多様な想起の枠組みの可能性や「代替的な選択肢」にとって不可欠である。アーカイヴは特定の意図やストーリーから独立した形で，「無定形の集塊」として蓄積的記憶をできる限り多く保存することに価値を見出すことができる。ただし蓄積的記憶は「現在との生きたつながり」を失っている。そこで，マス・メディアやソーシャル・メディアにおけるメディア実践を通じて，特定の記憶が機能的記憶化しない限り，その記憶が広く想起されることはない。ただし機能的記憶は必然的に「政治的な要求を伴う」ものであり，「アイデンティティに明確な輪郭が与えられる」ことに留意しなければならない（ibid.：170）。機能的記憶が構築されたことに満足し，「可能性，代案，矛盾，相対化，批判的な異議申し立ての潜在的な貯蔵庫である蓄積的記憶が閉め出されると，変化は排除され，記憶の絶対化と原理化に至る」（ibid.：170）。民主社会において多様な想起の枠組みを維持するためには，蓄積的記憶と機能的記憶の流動性が常に担保されている必要があり，そのためにはアーカイヴとマス・メディア（ソーシャル・メディア）という二つのメディアが，人々のメディア実践によって接続されていなければならない。

4　メディア記憶の基礎となるメディア実践

現代社会において過去の出来事はメディア記憶として現前する。本論文では，1990 年代における集合的記憶論の興隆の延長線上にメディア記憶論を位置づけ，特にメディア実践に着目した集合的記憶の構築過程の議論の重要性を指摘した。ジャーナリストや政治家，一般のユーザーといったさまざまな主体のメディア実践が重なり合うなかで，メディア記憶は構築・想起されている。本論文ではネイガーの分類に依拠しながら，メディア実践を通じて構築される記憶の現在性，過去からの連続性，政治性，テクノロジーから受ける影響，物語性などを論じてきた。さらにアルヴァックス以後のノラ，J. アスマン，A. アスマンによる集合的記憶論をメディア実践の観点から考察した。ノラの「記憶の場」やアスマン夫妻の記憶史の議論は，メディア実践による集合的記憶の構築過程を論じる上での理論的基礎となりうる。本論文で検討してきたように，メディア実践を媒介として，記憶の社会学とメディア論（メディア記憶論）が接合することで，集合的記憶の構築過程の現代的特徴が明らかになるのではないだろうか。

最後に社会的記憶や国家的記憶の構築過程におけるジャーナリズム実践の特権性を指摘したい。ソーシャル・メディアの発達に伴って，誰もが情報発信者になれる時代が到来し

たと言われるものの，社会的記憶とメディアの議題設定機能を結びつける実証研究では，マス・メディアやジャーナリズムの影響力の大きさが明らかにされている（Kligler-Vilenchik et al. 2014 など）。筆者は別稿でもジャーナリズム論に基づく集合的記憶の構築過程の議論の必要性を論じている（佐藤 2020）。多様な主体によるメディア実践を考慮に入れつつ，その中でもジャーナリズム実践の特権性を意識して集合的記憶の構築過程を論じることが，社会的記憶や国家的記憶を考察する際には求められるのではないだろうか。

●付記

本研究は JSPS 科研費 JP19J21120 の助成を受けたものである。

●注

1 「記念事業者（commemorators）は，1970 年代後半に始まった『記憶ブーム』が，2000 年代に入ってようやく収束に向かっていると言っているが，多くの人々はそれが衰えずに続いているとみなしている」（Olick et al. 2011：1）と指摘されるように，大規模な記念事業は 20 世紀後半の方が頻繁に行われていた可能性があるものの，社会内部での「記憶ブーム」自体の勢いは 21 世紀になっても衰えていない。

2 もちろん 1990 年以前にも，メディアと人々の日常の実践との関わりを論じる重要な研究は存在した。例えばリチャード・ホガートの『読み書き能力の効用』やレイモンド・ウィリアムズの『文化と社会』は，イギリスの労働者階級の暮らしにいかにメディアやマス・カルチャーが関わっているかを論じた，1950 年代の重要な研究である（Hoggart 1957=1986；Williams 1958=2008）。

3 クドリーは例として，Twitter を実践理論の観点から分析している（Couldry 2012=2018：68-69）。Twitter は，「一定のオーディエンスを有する人物」が「非公式の発言を行う」手段として，「メディアの中で高い地位を獲得している人物」が「オンライン上で存在感を維持する」手段として，また「諸集団」がアドレスやハッシュタグを用いて一つにまとまり，「存在感を提示する」手段として用いられている。技術的制約，社会規範，ルーティーンなどの影響を受けるメディア実践の集合体として Twitter は捉えられる。

4 集合的記憶の学説史の研究者からは，「アルヴァックスが，現在が常に過去に対して優位にあると述べていると解釈するのは早計」であり，「過去が現在に対して力を持つ局面もあれば，現在が過去に対して力を持つ局面もある」（金 2020：93）といった，「現在主義」への批判も提起されている。こうした批判は，ネイガーの分類（現在から過去への視点と過去から現在への視点という双方向性）の妥当性を示しているといえる。

5 例えばアジア・太平洋戦争中に死んだ特攻隊員の遺書や遺影を展示している知覧特攻平和会館について，各政党の政治家が国会の議論において繰り返し言及している。具体的には川内博史（民主党：2004 年 3 月 31 日：衆議院文部科学委員会），田沼隆志（日本維新の会：2013 年 4 月 10 日：衆議院予算委員会）など。また小泉純一郎（自由民主党）は 2001 年 2 月 9 日に知覧特攻平和会館を訪問し，同年 5 月 21 日の参議院予算委員会では「総理大臣を拝命した現在も，特攻隊青年の気持ちに比べれば，こんな苦労は何でもないという気持ちで立ち向かっているつもりです」と答弁している（『毎日新聞』2001 年 8 月 9 日）。

6 アルヴァックスの『聖地における福音書の伝説的トポグラフィー』での議論は，キリスト教コミュニティにおける集合的記憶の変容と，聖地の地理的変更が連動していることを描き出しており，記憶史とも親和的である（Halbwachs 1941=1992）。

7 ここでのアーカイヴは，一般に想定されるものよりも広く捉えられる必要がある。例えば，投稿者すらその存在を忘れてしまった書き込みが残存し続けているソーシャル・メディアのプラットフォームも，アーカイヴ的側面を有したメディアと捉えられる。

●参考文献

Anderson, B.（1983=2007）*Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Verso.（白石隆・白石さや訳『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行―』書籍工房早川）。

Assmann, A.（1999=2007）*Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*. C. H. Beck.（安川晴基訳『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』水声社）。

Assmann, A.（2016=2019）*Das Neue Unbehangen an der Erinnerungskultur: Eine Intervention*. 2nd Edition. C. H. Beck.（安川晴基訳『想起の文化：忘却から対話へ』岩波書店）。

Assmann, J.（1998=2017）*Moses der Ägypter: Entzifferung einer Gedächtnisspur*. Carl Hanser.（安川晴基訳『エジプト人モーセ：ある記憶痕跡の解読』藤原書店）。

Coser, L., A.（1992）“Introduction Maurice Halbwachs 1877-1945” in Halbwachs 1992.

Couldry, N.（2012=2018）*Media, Society, World: Social Theory and Digital Media Practice*. Polity Press.（山腰修三監訳『メディア・社会・世界：デジタルメディアと社会理論』慶應義塾大学出版会）。

Fox, N., J. & Alldred, P.（2019）“The Materiality of Memory: Affects, Remembering and Food Decisions” *Cultural Sociology*. 13（1）20-36.
Fukuoka, K.（2018）“Japanese History Textbook Controversy at a Crossroads: Joint History Research, Politicization of Textbook Adoption Process, and Apology Fatigue in Japan” *Global Change, Peace & Security*. 30（3）: 313-334.
Garde-Hansen, J.（2011）*Media and Memory*. Cambridge University Press.
Halbwachs, M.（1925=2018）*Les Cadres Sociaux de la Mémoir*. Alcan.（鈴木智之訳『記憶の社会的枠組み』青弓社）。
Halbwachs, M.（1941=1992）*La Topographie légendaire des Évangile en Terre Sainte*. P. U. F.（Coser, L. A. *The Legendary Topography of the Gospels in the Holy Land*. in: Halbwachs 1992）.
Halbwachs, M.（1950=1989）*La Mémoire collective*. P. U. F.（小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社）。
Halbwachs, M.（1992）*On Collective Memory*. Edited, Translated, and with an Introduction by L. A. Coser. University of Chicago Press.
浜井祐三子編（2017）『想起と忘却のかたち：記憶のメディア文化研究』三元社。
Hobsbawm, E. & Ranger, T.（1983=1992）*The Invention of Tradition*. Cambridge University Press.（前川啓治・梶原景昭訳『創られた伝統』紀伊国屋書店）。
Hoggart R.（1957=1986）*The Uses of Literacy: Aspects of Working-Class Life, with Special Reference to Publications and Entertainments*. Chatto and Windus.（香内三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社）。
Huyssen, A.（1995）*Twilight Memories: Marking Time in a Culture of Amnesia*. Routledge.
金瑛（2020）『記憶の社会学とアルヴァックス』晃洋書房。
神谷英二（2016）「瓦礫の記憶論のために」『福岡県立大学社会学部紀要』24（2）77-90。
Kligler-Vilenchik, N., Tsfati, Y. & Meyers, O.（2014）“Setting the Collective Memory Agenda: Examining Mainstream media Influence on Individual’s Perceptions of the Past” *Memory Studies*. 7（4）: 484-499.
Langenbacher, E. & Eigler, F.（2005）“Memory Boom or Memory Fatigue in 21st Century Germany?” *German Politics and Society*. 23（3（76））: 1-15.
光岡寿郎（2017）『変貌するミュージアムコミュニケーション：来館者と展示空間をめぐるメディア論的想像力』せりか書房。
Morris-Suzuki, T.（2005=2004［2014］）*The Past within Us: Media, Memory, History*. Verso.（田代泰子訳『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』岩波書店）。
Neiger, N., Meyers, O. & Zandberg, E.（Eds.）（2011）*On Media Memory: Collective Memory in a New Media Age*. Palgrave Macmillan.
Neiger, N.（2020）“Theorizing Media Memory: Six Elements Defining the Role of the Media in Shaping Collective Memory in the Digital Age” *Sociology Compass*. 14: e12782.
野上元（2006）『戦争体験の社会学：「兵士」という文体』弘文堂。
野上元（2010）「『戦後』意識と『昭和』の歴史化：『戦争体験』の歴史性と普遍性」『マス・コミュニケーション研究』76: 105-116。
野上元（2011）「テーマ別研究動向（戦争・記憶・メディア）：課題設定の時代非拘束性を越えられるのか？」『社会学評論』62（2）236-246。
Nora, P.（1984=2002）“Entre Mémoire et Histoire: La problématique des lieux” P. Nora ed., *Les Lieuxde Mémoire*. Volume 1: Gallimard.（長井伸仁訳「記憶と歴史のはざまに」『記憶の場 1 対立』岩波書店）。
Nora, P.（1992=2003）“L’ère de la commémoration” P. Nora（Ed.）*Les Lieuxde Mémoire*. Volume 7. Gallimard.（工藤光訳「コメモラシオンの時代」『記憶の場 3 模索』岩波書店）。
Olick, J., K. & Robbins, J.（1998）“Social Memory Studies: From “Collective Memory” to the Historical Sociology of Mnemonic Practices” *Annual Review of Sociology*. 24: 105-140.
Olick, J., K., Vinitzky-Seroussi, V. & Levy, D.（2011）*The Collective Memory Reader*. Oxford University Press.
Person, R. F. J. & Keith, C.（2017）“Media Studies and Biblical Studies: An Introduction” Thatcher, T., Keith, C., Person, R. F. J. & Stem, E. R.（Eds.）*The Dictionary of the Bible and Ancient Media*. Bloomsbury T & T Clark. 1-15.
Ross, K. and Nightingale, V.（2003=2007）*Media and Audiences: News Perspectives*. Open University Press.（児島和人・高橋利枝・阿部潔訳『メディアオーディエンスとは何か』新曜社）。
佐藤信吾（2020）「集合的記憶の構築過程に関するジャーナリズム論的考察」『メディア・コミュニケーション』70: 43-55。
佐藤信吾（2021）「戦跡における集合的記憶の構築過程に関するジャーナリズム論的考察：知覧特攻平和会館を事例として」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』90: 31-45。
Schudson, M.（1992）*Watergate in American Memory: How We Remember, Forget, and Reconstruct the Past*. Basic Books.
Schudson, M.（1995）“Dynamics of Distortion in Collective Memory” D. L. Schacter（Ed.）*Memory Distortion: How Minds, Brains, and Societies Reconstruct the Past*. Harvard University Press. 346-364.
Schudson, M.（1997）“Lives Laws, and Language: Commemorative versus Non-commemorative Forms of Effective Public Memory” *The Communication Review*. 2: 3-17.
Silverstone, R.（1999=2003）*Why Study the Media?*. Sage Publication.（吉見俊哉ら訳『なぜメディア研究か』せりか書房）。
Szpociński, A.（2016）“Sites of Memory” *Teksty Drugie* English Edition. 1（9）: 245-254.
谷島貫太・松本健太郎編（2017）『記録と記憶のメディア論』ナカニシヤ出版。
Van Dijck, J.（2007）*Mediated Memories in the Digital Age*. Stanford University Press.

Williams, R.（1958=2008）*Culture and Society*. Chatto and Windus.（若松繁信ら訳『文化と社会』ミネルヴァ書房）。
Winter, J.（2001）“The Generation of Memory: Reflections on the “Memory Boom” in Contemporary Historical Studies” *Canadian Military History* 10（3）57-66.
山腰修三（2012）『コミュニケーションの政治社会学：メディア言説・ヘゲモニー・民主主義』ミネルヴァ書房。
安川晴基（2008）「『記憶』と『歴史』：集合的記憶論における一つのトポス」『藝文研究』94: 282-299。
Zelizer, B.（1992）*Covering the Body: the Kennedy Assassination, the Media, and the Shaping of Collective Memory*. University of Chicago Press.

佐藤信吾（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員）